

寡婦の秘密

或時小夜子は物を縫ひながらふと、前後になんの續きもなくこんなことを思ひ出した。それは今まで考へても見ようとしなない、全くそれはふと、何かのはずみに浮き出した記憶であった。

小夜子の生れたところは、東北の或る小さな田舎町で、御維新こつち國道の兩側に細長く展けた商業地であった。冬になると——小夜子の印象にはいつも冬のみが生きて居たから——どんよりと曇った。外といふ外に水蒸氣の影をひそめた日ばかり多くていつかはらはらと降るともなく散つて來る雪にさへ水氣のない霰まじりのほろほろしたのが、馬の尿の雪を解かして凍った地べたへ、或は捨てられた密柑の皮の中へほろほると轉び込む、とさういったやうな日が時を綴つて行く。

馬を曳いて買物に出て來る近在の人は、十一時頃から三時頃までの間に、大概町の用をすまして、又とツとツと手綱を曳いて歸つて行く。顔をちつぽり布で包んで、むくむくと鐵砲袖に着ふくれて、脛まで届く藁靴を履いて——若しそれがピチャピチャと道に鳴るやうであつたら、檐の氷柱のゆるんだ日、泥まじりに雪の道が解けかけた日で、つまり言へば暖いのである。

若し又、朝から、或は明け方から、卍巴の喩へは陳い、小粒は大粒を追ひ、大粒は小粒と小粒の間を填めて、後から後からと、又後から後からと猶豫もなくその癖焦心りもしないで音もなく降り積む雪の日ならば、人出のないのを見越したやうに、いづれもの家が葎を下して、潜りを閉めて、薄暗くなった店で番頭達は講談本でも讀んでるいふ風、此時よくよくで通る人があつたら、手も足も顔も見えぬ、たゞ黒い塊りが、むくむくと獸のやうに動いて行くのが見られるだけである。そして時々、物好きな小僧が尺度を持って出て、もう幾寸積つた——など、言つて居る。

そんな記憶は絶えず小夜子の頭の中に潜んで要る。

小夜子の生れた家は、その町の北のはづれの裏側で、家と家の間の空地を潜つて突き當ると、「ゆ」とした字のかすれた瓦斯燈がしょんぼりと立つて居る、そこがさうであつた。板の間を洗う終ひ湯の音を寢耳に聞きながら、家中に漲る湯氣に蒸されて小夜子は育つたのである。夜になると、洋燈も何もぼんやりと曇つてしまつてガヤガヤワヤワヤといふ響きが家の中一っぱいに籠つてしまふ。そして、時々そのガヤガヤワヤを判然させるやうに、鋭い聲で赤子が泣き出す。

さういふ光景ありさまを小夜子は十二の年まで見た。その年無智な正直な父親は、天理教の爲めにすっかり家屋敷を入れあげてしまつて、土地に居られないやうな見窄みすぼらしさになつてしまつたのである。小夜子は併しそれからが幸福であつた。彼女は遠い處の、子供のない裕ゆたかな伯母の手に渡されたのであつた――。

その十二までの友達に、まさ代さんといふのがあつた。學校は同級、家は近し、二人は随分仲善く遊んだ。學校の歸りに喧嘩をしても、家に歸つてお錢あしを貰つて、何か買つて來る歸りには、必とまさ代さんの家に寄つて喰べた。まさ代さんの家は、茶店兼旅籠家はたごやで、間口の馬鹿に廣い、さうして其大部分が土間であつた。その土間に背の高いおへついが並んで居る。さうして棚には井だの茶碗だの椀などが伏せて並べてある。草鞋わらじのまゝ踏み込んであたられるやうになつて居る大きな切爐きりろには、煤けた自在鍵のまんまるい大きな鐵瓶てつびんが下つて居る。或時はそこに煮豆の匂ひがしたり、チロチロと燃える焚き火のぐるりに、串に刺した茸ひらなぞが眞黒になつて炙あぶられて居たりする。

晝時分ひるになると、一人二人の客が、防寒具のまゝ爐ろぶちに陣取つて、豆腐のお汁など、大きなお握むすびを嚙かちつて居る。茶屋としてはちつとも繁昌はんじやうする方はたでなかつた。その代りこの家の饅頭うどんだけは一寸知られて居た。ひもかわを一ぱいと云つて、馬には近所の豆腐屋から豆腐の湯なんぞを貰つて來てあてがつて、夕方の歸り路に寄つて行く人があつた。

小父さん――小夜子からいへば――は、一寸面白い人で、まさ代さんにも優しかつた。釣りの好きな人で、毎日のやうに竿を擔かついで魚籠びくをさげて、大黒池といふのに釣りに行つて居た。それにつけて小夜子が思ひ出せるのは、まさ代さんと二人でいつか其釣りに連れて行つて貰つたのと、小父さんがお酒を飲んでるところに行き合して、無理無理一口飲ませられた時のお肴さかなだつたきんぴら牛蒡ごぼうが、涙が出るほど辛かつたことである。その小父さんは、まさ代さんと小夜子が十一の時に腹膜炎で死んだ。煤すすのやうな嘔吐へびを吐はいて、（それはまさ代さんがその時小夜子に報告した言葉である）苦しんで死んでしまつた。

廣い家にまさ代さんは小母さんとたつた二人になつた。もとから下婢なぞを置いて手廣く旅籠屋をやつて居たのではないので、離れ二た間に表二階二た間は女二人に廣過ぎた。けれども小母さんは、別段下宿人を置かうとするでもなかつた。一體今考へると、あの家の本業はなんであつたかと思はれるほど總てがいゝかげんなものであつた。小父さんが生きて居る時分からさうだが、格別愛嬌を振り撒いてお客を呼ばうとするでもなく、軒たてのはづれに下げてある「諸國御商人御泊所」といふ看板を見當みあててにして夕方なぞに辿たどり着く商人を、

『無人なものですから……』と言つて、愛想つ氣もなく斷つて居た。ほんのよくよく知つた人ばかり泊めるんださうである。小夜子は曾てそんな時に居合して、成程そんなものだらうと思つたことがあつた。離れに泊まつたお客が、夜半に強盗と變つて女親子を脅かす——？ さうだ、そんなこと無いとも限らないと思つて、小夜子は知らない客人を泊めないことに感心して同意した。

まさ代さんが學校に行くと、小母さんは全く一人ぼつちになつてしまふのである。小母さんは時々、寂しさうに往來を眺めて饅飴を踏んで居た。少し蕎麦滓はあつたが、若い時は美人のうちだつたらうと思はれるやうな顔容ちで、髪はいつもキチンといゝ加減の鬘に結つて居た。あんまり華かに笑つたことのない人であつた。

或る晩——多分それは舊正月時分だつたやうに思はれる。小夜子はまさ代さんの家に遊びに行つて、たつた二人で雙六をやつて居た。小母さんは長火鉢のふちに肘をかけて、鐵瓶の胴を爪でカチカチ叩きながら、何かものを考へるやうな風で、二人の小娘が遊ぶのを見て居た。まさ代さんが時々例の調子の張つた聲で可笑しさうに笑ひ出すと、小母さんも引き入れられたやうにうつすり笑つたりなどして居た。小夜子はさうして暫くまさ代さんと勝負を夢中になつて居ると、やがて離れの渡し廊下がギイギイと鳴つて、

『大へん面白さうだね、エ まつちゃん。』と、障子を開けてお客さんが出て來た。

先刻から離れに咳の音がしたり、いつになく灯影もさして居るので、小夜子は例のお客さんだらうと別に氣にもとめずに居たのだったが、その聲でふと振り向くとやつぱりその人だつた。それは近い村のお寺のお坊さんとかで、町に出て來るたびにまさ代さんの家に泊まることになつて居たのである。小父さんが生きて居た時分からのお客であつた。で小夜子はまた賽を振つた。

『お、二つだ！』と言ひながら、お坊様もそこに坐つたが、急に調子を替へて、

『今夜は歸ることにしやせう。』と小母さんに向つて言つた。

『なんですか？ お歸んなはんのけ、今夜？』と小母さんは吃驚したやうに顔をあげた。

『もう一と晩お泊んなすつたらようござせう、こんな遅くなつたんだもの……』

『いや、今夜はいくらなんでも歸らなくちやあ。それに先刻馬にも今日は是非とも歸るからつてさう言つてやつたで……。ちと今度は長逗留過ぎたわい。』

『それぢやつて貴方、こんなに雪が降り出したのに、こんな晩に是非とも歸んねけりやなんねつていふほどの用事もありませんまい。』

『あら、雪が降つて來たの？ 小母さん！』と小夜子はいきなり首を擡げて目を瞠つた。

小母さんはそれには返事しなかった。耳をすまして凝乎と外の物音に氣をとめると、氣のせみか、さやさやさやと微かな音が聞えるやうでもある。小夜子は少しく歸りが心配になったが、雪なら袂たもとでもかぶって行きあいゝと思つて、又雙六すしうくの面白さに紛まぎれてしまつた。けれどもなんだかもう腰を折られて初めのやうに面白くなつた。小母さんもお坊さんもそのまゝ黙つてしまつてるのが氣になつて、ひよいと顔をあげた時に、小夜子は少からず吃驚した。火鉢のふちに肘をかけた兩手の間に顔を埋うづめて下を向いて居る小母さんの顔から、ぼとりぼとりと露つゆが落ちて灰を叩いて居るのである。小夜子は目を丸くしてお坊さんの顔を見た。お坊さんは手持無沙汰に腕組みをして居たが、チラリと小母さんの方を見遣みやつて、見つめて居る小夜子のきよとんとした目に出つ遇くわすと、如何にもてれたやうに慌てゝ目を外らした。まさ代さんは小母さんの脇手の方に居たので、ちつともそんなことには氣がつかないらしかつた。お坊さんはやつぱり其夜ずるずに泊ることになつてしまつた――。

瞬間的に泛うかんだこんな記憶を、小夜子は珍うしきうにしてその前後を繰りひろげようとした。そしてふと、小母さんの涙に就いて考へかけた時に、憚はばかるものを直視した時のやうな、眩しさと氣の毒さとを味はつたのであつた。

底本…「水野仙子全集」第四卷

初出…「女子の友」大正五年三月

テキスト入力…小林 徹・誠

公開…平成二十九年八月八日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)